

持続可能な世界平和の実現

しみず まさひろ
清水 雅弘

●日本郵政グループ労働組合（JP労組）中央本部 労働政策局次長

私は間もなく52歳、昨年、じいちゃんになった。近くに住む孫との“面会”の機会が多い。生まれた頃は泣き声も小さくて可愛いものだったが、最近のそれは近づくと耳が痛くなるほど元気で、日々の成長が最近一番の楽しみである。

翻って、私が生まれた頃の日本は、その記憶は当然ないのだが、大阪万博の開催や第2次ベビーブームが到来した時期であり、高度経済成長期を経て、日本の国力が飛躍的に高まっていた時代だったと思う。そして、当時の沖縄は「日本」であり「日本」ではなかった。

第二次世界大戦後、1951年に署名された「サンフランシスコ講和条約」によってGHQによる「日本」の主権は回復したが、沖縄だけは太平洋地域の安全保障を確保するために必要などの理由で、アメリカの施政権下に置かれた。同じ「日本」であるにも関わらず、沖縄への渡航にはパスポートが必要であった。それから約20年の統治期間を経て、日米間で「沖縄返還協定」が署名され、1972年5月15日、沖縄の施政権が「日本」に返還された。

その日から50年、今の沖縄の状況はどうか。米軍基地や日米地位協定、尖閣諸島の問題など、いまだ多くの課題を抱えている。沖縄の方々の意識や価値観は当然変化したと思うが、平和を願う気持ちには変わりないだろう。

沖縄がそうした節目を迎えた今、ロシアによるウクライナに対する軍事侵攻が続いているが（4/21時点）断じて許される行為ではない。国際社会はどう対応すべきか。また、日本が

とるべき道は何か。きわめて難しい問題だと思うが、この点について、まず私が感じたことは、「強国・大国が暴れると手が付けられない」、また「話し合いだけでは解決できない国が存在する」ということだ。そして、無防備では自国の安全は守れないと強く感じた。経済制裁ばかりで傍観している欧米各国（日本を含め）の対応を非難する声も一部あるが、ロシアに立ち向かうには相当の犠牲が伴う。結果として大戦に発展する可能性が高く、慎重な判断が必要であり決断は困難である。

平和をどうやって維持していくか、これは意見が分かれると思う。日本だけ平和であれば良いでは通用しないし、軍事大国を目指すべきではないが、対話による解決や、ひたすら平和を願うだけでは始末がつかないから、自身の中で考えはまとまらず、このコラムを書いている今もジレンマを感じる。

歴史上、世界中で戦争は繰り返されてきた。残念ながら、将来にむけて戦争を無くすことは出来ないとも思う。ただ、今はウクライナで起こっている悲劇が一刻も早く終わり、再び平和に暮らせる日が訪れることを願っている。だから、私たちに出来る支援があれば積極的に関わっていききたい。

子供たちの未来を奪ってはならない、孫の顔を見て心からそう思う。今を生きる世代、そして未来の世代へ繋げていく「持続可能な世界平和の実現」は今、最大のテーマである。